

連載 **エッセイ**
No. 26

ふひょう いちどう
浮萍 一道 開く

● NPO法人ホップ
障害者地域生活支援センター

代表理事 竹 田 保

暑い日の方が、体が動かしやすい私にとって、夏は比較的過ごしやすい季節ですが、さすがに

今年のような連日の猛暑はへとへとです。10月に入りようやく涼しさを感じる季節になりました。気がつけばビアガーデン、オータムフェストも終了してしまいました。外出の機会が減ることに、少し寂しさを感じます。

今年、豪雨災害が続いていますが、私が災害について強く意識するようになったのは、阪神淡路大震災がきっかけでした。当時、避難所に避難した障がい者の二次避難にリフト付き車両を現地に持ち込む活動に参加しました。その際、避難所でトイレに行けずに我慢している方の話を聞きました。日常的な生活を維持するために、最低限必要なものさえも手に入らない状況を知り、災害支援のボランティア活動にも関わるようになりました。

その後、北海道でのブラックアウトでは、私自身も被災者となり、災害がいかにも日常を一瞬で崩壊させるかを痛感しました。停電が続く中、電動車いすのバッテリー残量を見ながら、冷や冷やしながら過ごしました。普段、当たり前に使っている電動ベッドや生活に必要な機器が、電力が途絶えた瞬間に使えなくなるという現実を目の当たりにしました。また、在宅酸素療法や人工呼吸器使用者が、電力復旧までの間に何とか代替手段を確保しようと苦労されていた姿が印象的でした。

このような経験を通して、災害時における電力確保が私たち障がい者にとっていかに重要であるかを強く実感しました。私自身、日常生活で電動車いすやその他の電動機器に依存しており、停電が起こると途端に不安が押し寄せます。バッテリーの残量を気にし、普段の生活では考えにくいストレスです。災害が発生すると、その日常が一瞬で崩れ去ることを実感しました。

阪神淡路大震災から30年が経とうとしています。当時、被災地ではトイレやベッドすら使えない状況が続き、大勢が過酷な生活を強いられました。その後、災害対応は進歩しているとはいえ、今回の北陸能登地方での災害において、その教訓がどれだけ生かされていたのか疑問に思うことがあります。特に、障がい者や高齢者など、災害弱者に対して、十分な支援が届いたのか懸念しています。

私も、先日東京の会議に出席した際、突如の雷雨で羽田空港が混乱し飛行機が欠航になった経験があります。早めに空港に到着したものの、雷雨の影響で発着中断により23時まで空港で待機しましたが、結局、飛行機は欠航し、振替便の手続きや車いすで泊まれるホテル探しに深夜までかかりました。ようやく宿泊先を確保できたものの、札幌行きの便は数日間満席で、大阪伊丹経由で帰ることになり、伊丹で5時間待ち、普段の生活では考えられない疲労感を感じました。

このような突発的な事態に直面すると、日常の生活がいかにも脆弱であることを痛感します。災害時には、障がい者や高齢者、電力依存の高い人々に対する支援体制が不足していると思います。私たちが安心して生活できる社会を築くためには、平常時からの備えと、社会全体でのサポート体制の強化が求められます。

そんな中、衆議院解散のニュースが流れてきました。選挙のたびに、障がい者や高齢者の生活改善について、候補者の訴えを期待して聞いています。災害時の支援や福祉制度の充実など、私たちの生活に直接影響を与える政策について真剣に取り組んでくれる声を聞きたいと強く願っています。選挙は、私たちの声を届ける大切な機会ですから、しっかりと声を上げ投票する必要があります。

振り返れば、今年は猛暑や災害に振り回された夏でした。それでも、私たちが少しでも快適に生活できるよう、そして社会全体が誰もが利用しやすい環境を目指して進むことを期待しています。そのための選挙であって欲しいと願います。